

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校近事〔二七一六〕^卷 T・八・一・三一^日

●辭令

雇を命ず、會計掛を命ず（一月八日）

金田 春吉

助教授 三浦 鈞三郎

依願免本官（一月十六日）

教授 大島 勝次郎

同 水谷 鐵也

同 松岡 輝夫

敍從七位（一月二十日）

助教授 八卷 於菟三

任宮内技手

調度寮勤務を命ず（一月二十一日）

職員動靜

○小 岩 峻氏 小石川、西丸町五二、榊原邸内に轉居。

○森 泉 倉 三氏 本郷、根津清水町七へ轉居。

○白 山 松 哉氏 一月初旬より凡三週間修善寺へ轉地療養。

○海 野 美 盛氏 一月中旬より二月上旬迄の見込にて、相州湯

河原へ轉地療養。

○三 浦 鈞三郎氏 今般辭職せられたるが、今後は窪田四郎内田

信也氏等の御兄弟によりて組織せられたる内田同族會の理事とし

て執務せらるゝ傍ら在來の通り牙彫に従事せらるゝ由。

○八 卷 於菟三氏 明治四十年三月金工科を卒業、同年十一月よ

り金工科助手として勤務し、大正六年六月助教授に進み、勤續せられたるが、今回宮内省へ榮轉し調度寮に於て金工關係の事務を掌らることとなれり。

生徒動靜

李 長 元氏（元西選三） 一月二十一日復校を許可せらる。

勝 海 俊 雄氏（彫選研） 一月十日退學

山口 禎 二氏（師三） 昨年三月卒業の處病氣にて延期中

なりしが回復せしにつき復校

東京美術学校近事〔二七一七〕 T・八・三・三一

●辭令

敍從五位 教授正六位 櫻 岡 三四郎

敍正六位 同 從六位 鎌 田 彌壽治

敍正六位 同 從六位 岡 田 秀

敍從六位 同 正七位 鹿 島 英 二

敍從六位 同 正七位 結 城 貞 松

敍正七位 同 從七位 長 原 孝 太郎

敍從七位 同 同 矢 代 幸 雄

（以上一月三十日）

書記 屋 代 欽 三

敍勲八等授瑞寶賞（二月二十七日）

助教授 伊 東 亮 次

休職を命ず(三月七日)

嘱託 關 保之助

依願解囑(三月十二日)

新納 忠之介

本校生徒京都府及奈良縣修學旅行に付臨時實地指導を囑託す(三月十三日)

職員動靜

○福井 信之進氏(休職教授) 二月七日支那より歸京せられしが、二月十五日休職満期となる。

○伊東 亮次氏(助教授) 三月十三日米國へ向け渡航せらる。

○關 保之助氏(囑託) 今回帝室博物館學藝委員を命ぜられ京都帝室博物館詰となる。

生徒動靜

西堀 定夫氏(版一) 一月三十日病死せらる。

北 久衛氏(圖一部卒業期) 松川と改姓せらる。

新川 長次郎氏(同上) 松田と改姓せらる。

東京美術學校近事(一八一—。T・八・五・三一)

●卒業式 本校第二十八回卒業證書授與式は三月二十四日午前十時舉行せられたり、卒業生姓名卒業製作目錄左の如し。

日本畫科

春 本科 望月 尙山梨

夏の朝、冬の夕

秋晴

那智、瀨八丁

青巒

供養の曼茶羅

家鴨

七夕

夕月

白梅

那須野の秋

榮華物語

唐美人

西洋畫科

自畫肖像、赤子

同、裸體

同、岩湯

同、老いたる漁父

同、秋の日

同、かぢめ採り

同、祈

同、種播き、憩ひ前

同、椅子によれる女

同、髪を梳く女

同、逝く者

同 柳澤眞一 長野

同 井上恆也 静岡

同 狩野政次郎 東京

同 大貫堅 栃木

同 小倉和一郎 東京

同 石井義一 千葉

同 番匠雄岳 石川

同 村上友一 富山

同 森 徹一 高知

選科 高木保之助 東京

同 吉村忠夫 東京

同 伍 靈 支那

本科 能勢龜五郎 鳥取

同 神谷萬吉 愛知

同 澤枝重雄 北海道

同 小野麟之助 愛知

同 蘆立文雄 宮城

同 大津逸次 熊本

同 鈴木清一 茨城

同 西村 勲 神奈川

同 野口六藏 長崎

同 太田勝二 東京

同 大内 齊 東京

タイル圖案
銅製花瓶圖案
同 黒木資一 鹿兒島
同 棚田多作 富山

第二部
議院建築圖案
本科 山田 猷 埼玉

金工科
誘惑
本科 杉浦哲三 北海道
同 井關知温 鳥取

毛彫透模様小管
同 同
佛誕
同 染谷駒太郎 東京

觀音
選科 川上勝三郎 東京

鑄造科
花盛器
本科 中島 助次郎 富山

漆工科
蠟色地棕欄圖蒔繪文臺
本科 鶴田 恒二郎 石川
同 松田 權六 石川

小手管
同 福澤 健一 富山
乾漆製觀音像
同 辻 正作 香川

經管
色紙管
同 池 龜 文次 新潟
同 北 森 角二 富山

山水額面
同 高 井 榮四郎 新潟
選科 高 井 榮四郎 新潟

桐木地天平模様蒔繪冊子管
同 吉 田 源十郎 高知
乾漆製大花瓶
同 高 山 光 明 東京

荒金地日廻模様蒔繪管
同 同
風呂先屏風
同 幸 王 好太郎 奈良
乾漆花瓶
同 稻 田 光太郎 東京

製版科

春光
臨時寫真科

水草
本科 荻原 義彦 栃木
同 高橋 環 新潟

女
水郷の夏の夕
同 山口 勇 山形
同 伊藤 武 東京

淋しき女
同 辻 一郎 東京
同 萩原 退藏 群馬

冬枯の田舎
選科 宮村 一則 熊本
海邊の家
同 同

圖畫師範科
近藤 廣記 宮城
同 伊藤 武夫 愛知

佐藤 湊 山形
同 松岡 圭三郎 静岡
同 前田 伊作 静岡

向井 正一 奈良
同 山下 一雄 佐賀
同 山口 禎二 福岡
同 山 口 禎二 福岡

池邊一夫大分

上貞久三廣島

木村 實長野

卒業生科別人員

科名	本科	選科	計
日本畫科	一〇	三	一三
西洋畫科	三〇	一	三一
製造部	七	〇	七
彫刻科			
木彫部	三	二	五
牙彫部	一	一	二
圖案科			
第一部	一〇	〇	一〇
第二部	一	〇	一
金工科	三	一	四
鑄造科	一	〇	一
漆工科	六	五	一一
製版科	七	一	八
臨時寫真科	六	一	七
圖畫師範科	一五	一	一五
合計	一〇〇	一五	一一五

●新入學生 本年度新入學生として入學を許可せられたるもの左の如し。

豫備科

日本畫科

北海道 久本 春雄
 東京 藤森 德太郎
 東京 德島 山下 喜一郎

石川 前阪 順三郎	巖手 根本 善治	山形 川村 智保	東京 狩野 莊二	石川 奥泉 茂三郎	静岡 幸田 邦次郎	栃木 大塚 圭	静岡 伊藤 孝	長野 小林 高治	佐賀 田邊 勝	神奈川 廣本 了	長野 手塚 宇宙兒	鹿兒島 鱒坂 高	東京 星 三郎	大阪 丹治 伊三郎	秋田 渡邊 浩三	宮城 佐藤 幸市	東京 肥田 爲雄	京都 前田 喜男	栃木 中村 一郎	栃木 寺内 要一	愛知 山本 敏太郎	福岡 山本 和夫
石川 北川 幸友	滋賀 藤居 二郎	山形 勝山 重英	東京 富岡 弘二	石川 堀 脩三	岡山 中吉 正	佐賀 緒方 龍一	東京 藤井 隆	神奈川 小林 和郎	北海道 二瓶 徳松	福島 大森 義夫	福岡 青山 新	神奈川 岩田 榮之助	熊本 富永 親徳	熊本 田邊 喜規	山梨 長島 喜豊	静岡 岡島 豊	東京 石川 悟郎	高知 西川 浩	埼玉 山崎 米次郎	神奈川 加山 四郎	兵庫 井上 榮三	埼玉 板倉 鼎

愛媛	福岡	岡山	富山	大阪	京都	福井	東京	茨城	石川	宮城	東京	石川	大阪	滋賀	東京	群馬	東京
松本太郎	筒井英夫	第二部 佃政道	梨谷了祐	平井和五郎	大島重良	高田知之	野間政治	三澤寛	木彫部 近江治郎	小室達	三角泰	林謙三	彫刻科 吉年素彦	熊本有七郎	西澤謙三	住吉義雄	長義明

群馬	東京	千葉	大阪	熊本	東京	石川	高知	東京	石川	東京	神奈川	福岡	東京	滋賀	東京
鈴木五郎	日高博	荒野虎雄	下阪英夫	奥田貞雄	鈴木豐治郎	中井一英	上田秋夫	長谷川亮一	東江波知彰	駒太郎	土方久功	向阪次郎	小泉清	野口謙藏	岡鹿之助

埼玉	鹿兒島	長崎	山形	長野	岩手	山口	東京	東京	東京	富山	大阪	福島	東京	北海道	静岡	栃木	東京
杉浦竹治	松崎健藏	畑田一男	山岸貞造	三村二郎	山口清一郎	小林德二郎	一色曜雄	菅井剛彦	石井俣夫	飯野直次郎	田中貞二	漆工科 原瀬三二	林信之	杉浦哲三	土屋春野	福田三郎	金澤庸治
														鑄造科			

岐阜	群馬	新潟	佐賀	山梨	埼玉	福島	東京	富山	愛知	群馬	静岡	京都	東京	愛知
山田新吉	武井勝雄	堺時雄	古川成俊	古屋幸壽	清水新太郎	飯塚彦一	橋本鴻	山崎覺太郎	佐原貢	宮澤均	山口益	溝口安太良	重田忠保	服部晃三

山形	高橋榮作	愛媛	藤谷庸夫
新潟	吉田三郎	新潟	淺野秀一
東京	小泉繁	大分	久下善之丞
栃木	石川要重	福島	渡邊幸
岡山	横山吉秋	長野	中村正見
茨城	椎名茂雄	京都	鳥居利三郎
山形	酒井直次郎	福島	矢吹誠
埼玉	守屋佐市	新潟	大瀧寅吉
宮城	大友一三	石川	竹谷長松
徳島	齋川五郎平		
東京	山田稔		

製版選科第一年級

●職員動靜

- 六角 紫 水氏 小石川區久堅町七四の二四號へ轉居。
- 鈴木 宮 吉氏 今回「長口」^{フナゴケ}と改姓
- 吉原 長 宗氏 下谷區谷中三崎南町二十七へ轉居。

東京美術學校近事〔一八一—二。T・八・七・三一〕

●辭令

雇を命す、彫刻科助手を命す（四月十日）

北原 鹿次郎

久米 福衛

雇を命す、臨時寫真科助手を命す（四月十一日）

成田 隆吉

依願免本官（四月十四日）

教授 平田 宗幸

臨時雇を命す、文庫掛を命す（四月十九日）

吉村 忠夫

休職を命す（四月二十三日）

教授 鹿島 英二

任東京美術學校助教、金工科彫金實習擔任を命す

雇助手 海野 清

任東京美術學校助教、製版科製習製版擔任を命す

雇助手 ^{〔製版実習、製版術〕} 小林 龜五郎

任東京美術學校助教、化學並化學實驗工藝化學擔任を命す

雇助手 長口 宮吉

任東京美術學校助教、金工科彫金實習金工製作法擔任を命す

雇助手 神 矢 教 親

任東京美術學校助教、圖書師範科西洋畫擔任を命す

雇助手 田 邊 至

任東京美術學校助教、日本畫科日本畫擔任を命す

雇助手 篠 田 十一郎

圖案科第一部金工科鑄造科漆工科に於ける豫備科主任兼務を命す

囑託 鈴 川 信一

美術史研究室主任兼務を命す

教授 大村 西崖

敎授 岡田 三郎助
敎勲五等授瑞寶章（以上同月二十三日）

雇を命ず、漆工科白山教授付助手を命ず
高野 重人

嘱託 下田 次郎
依願解囑（以上五月五日）

敎授 結城 貞松
兼任東京女子高等師範學校教授

敎授 松岡 輝夫
兼任東京女子高等師範學校教授

嘱託 平田 榮二
兼任高等官七等（以上五月十二日）

雇助手 田邊 孝次
任東京美術學校助教（五月十五日）

本校雇を解き更に講師を囑託、教務掛兼美術史研究室助手を命ず
（五月二十三日）

助敎授 小林 龜五郎
敎授 小林 萬吾

講師 岡田 起作
依願解雇（六月四日）

雇 森泉 倉三
教員檢定委員會臨時委員被仰付（五月三十一日）

雇助手 久米 福衛
本校雇を解き更に講師を囑託

但臨時寫真科實習擔任の事
雇助手 北原 鹿次郎

本校雇を解き更に講師を囑託
但彫刻科實習擔任の事
雇助手 成田 隆吉

本校の雇を解き更に講師を囑託
但臨時寫真科實習擔任の事
雇助手 野口 六三

本校雇を解き更に講師を囑託
但金工科實習擔任の事
敎授 海野 美盛

依願金工科理事を免ず
助敎授 海野 清

金工科理事を命ず（以上六月二十一日）
東京美術學校近事〔一八一—三。T・八・八・三一〕

●辭令
依願解雇（四月十日）

雇助手 淺井 甚三郎
從六位 高橋 健自

考古學授業を囑託

從七位 黒木安雄
歴史及考古學授業を囑託（以上四月十二日）

菅原教造
教育學修身授業を囑託（五月八日）

教授 久米桂一郎
圖案科金工科鑄造科漆工科の豫備科に課する西洋畫擔任兼務を命ず

教授 白井保次郎
同上の豫備科に課する木彫擔任兼務を命ず

教授 沼田勇次郎
同上の豫備科に課する塑造擔任兼務を命ず（以上五月十三日）

今和次郎
本校講師を囑託

齋藤佳藏
但工藝製作法擔任の事

從六位 山本正三郎
本校講師を囑託

但彫金實習擔任の事
教授 神木健介

圖畫教員志望者に課する用器畫法擔任兼務を命ず（以上五月二十二日）

助教授 津田信夫
鑄造科理事を命ず（六月二十一日）

教授 大村西崖
「以上前號報告漏」

彼勲五等授瑞寶章（六月二十七日）

柳生常治郎
雇を命ず、文庫掛を命ず（七月二日）

教授 大村西崖

同 白濱 徹

同 鎌田彌壽治
大正八年度師範學校中學校高等女學校教員等講習會講師を囑託す（七月四日）

講師 今和次郎

同 菅原教造

同上事務取扱を囑託す
同上助手を囑託す（以上七月七日）

雇 戸部隆吉

正木直彦

岡田三郎助

島田佳矣
工藝展覽會審査員被仰付（七月十八日）

津野美盛
教授 白濱 徹

山本正三郎
同 菅原教造

辻村延太郎
同 今和次郎

津田信夫
同 鎌田彌壽治

香取秀治郎
同 白濱 徹

白濱 徹

大正八年度文部省視學委員を命ず(七月十八日)

教授 櫻岡三四郎

依願免本官(七月二十一日)

從五位勲六等 櫻岡三四郎

紋正五位

持旨を以て位一級被進(八月十日)〔同年九月十八日死去〕

杉田精二

本校講師を囑託

鑄造科實習擔任の事(八月十一日)

教授 古宇田 實

建築裝飾術研究の爲二個年間米國英國佛國伊國へ留學を命ず(八月十五日)

教授兼東京高等師範學校教授

小林 萬 吾

依願免兼官(八月十八日)

囑託 澤村 專太郎

任京都帝國大學助教授

紋高等官七等

文學部勤務を命ず(八月十八日)

●職員動靜

○香取秀眞氏(囑託) 七月十日母堂を喪はる、御哀悼に堪えず。

○江崎清氏(囑託) 八月二十一日令夫人永眠せらる、御傷心御同情に勝えず。

○三浦柳三郎氏(元助教授) 今春本校を辭せられたる同氏は去る七月二十九日午後十時四十分東海道垂井驛にて列車衝突の奇禍に遭

ひ即死せらる。悲惨の極みなり、御哀悼に堪えず。

東京美術學校近事(一八一四。T・八・九・三〇)

●職員辭令

大正八年八月三十日

講師 田邊 孝次

勤務演習ノタメ九月一日ヨリ十一月三十日迄歩兵第三聯隊へ召集ヲ命ゼラル

講師 田邊 孝次

任東京美術學校助教授、體操授業擔任兼教務掛美術史研究室勤務ヲ命ズ

九月八日

講師 澤村 專太郎

依願解囑

(各通)

教授 黒田 清輝

同 高村 光雲

同 岡田 三郎助

同 和田 英作

同 小堀 鞆者

同 川合 芳三郎

帝國美術院會員被仰付

學校長 正木 直彦

帝國美術院幹事被仰付

帝國美術院書記ヲ命ス

九月十八日

書記 屋代 欽三

東洋彫刻史分擔ヲ命ス

九月十九日

助手 戸部 隆吉

教授 藤島 武二

(各通)

同 結城 貞松

同 長原 孝太郎

同 松岡 輝夫

帝國美術院美術展覽會審査委員被仰付

九月二十二日

教授 海野 美盛

敍正五位(特旨)

●職員動靜

結城 林 藏氏 御實母逝去に付九月九日より一週間郷里新潟縣

へ歸省。

島田 佳 矣氏 夏^[季]李休業中沖繩縣及岩手縣の講習會へ講師として出張。

●選科新入學生

本年度選科第一年生として入學を許可せられたるもの左の如し。(九月二十三日官報掲載)

日本畫選科第一年

石川 吉岡 吉太郎 福島 石塚 省三

東京 森 敏彦

西洋畫選科第一年

愛媛 筒井 昇

支那 何 善之

支那 陳 元 漸

彫刻選科(塑造部)第一年

山形 田中 久作

同 (木彫科)第一年

長野 增澤 公平

金工選科第一年

大阪 山田 甲子雄

東京美術學校近事〔十八―五。T・八・十・三一〕

●職員辭令

大正八年九月三十日

美學授業ヲ増囑ス

化學及工藝化學ヲ増囑ス

同 十月一日

帝國美術院事務ヲ囑託ス

同 同月十六日

支那 譚 華 牧

支那 張 戴 泗

支那 雷 公 賀

島根 木山 豐四郎

長野 丸山 節

香川 松原 繁 信

講師 菅原 教造

講師 森 芳太郎

書記 北浦 大介

講師 辻村 延太郎

〔漆〕
清工製作法分擔ヲ命ズ

●職員動靜

◎助教伊東亮次氏 本年三月以來寫眞及製版術視察研究の爲め、私費渡米中の所十月六日歸朝せらる

◎選科生新入學 九月二十九日附を以て左記の通り入學を許可す

彫刻選科塑造部第一年級

奈良 松岡 正雄

○本校設置記念日 十月四日午前九時より職員生徒一同大講堂に參集し本校設置記念式を舉行、正木〔直彦〕校長の式辭に次いで勤續二十五年に亘る漆工科講師橋本市藏氏に對して表彰式を行ひ、目錄一對を贈呈し終るや、本校創立當時の關係者今泉雄作氏の頗る興趣に富みたる『回顧談』（本誌本號卷頭說話參照）あり、貞山の講談『義士』一席を以て式を閉ぢ、式後會議室にて茶菓の間に談笑を交はして散會せるが、當日は卒業生の參會者頗る多く、盛況を呈せり。

東京美術學校近事〔一八一六。T・八・十一・三〇〕

●職員辭令

敍勲五等授瑞寶章（十月二十五日）

教授 和田 英作

同 鎌田 彌壽治

光化學及寫眞製版研究ノ爲滿二箇年間米國英國へ留學ヲ命ス（十月二十七日）

雇 中島 新助

依願解雇（十一月六日）

教授 白濱 徹〔色〕

學術實地指導ノ爲京都大阪愛知三重奈良兵庫ノ二府四縣へ出張ヲ命ス（十一月六日）

教授 鎌田 彌壽治

佛國ヲ留學國ニ追加ス（十一月七日）

助教 津田 信夫

任東京美術學校教授（十一月十日）

敍高等官七等

清水 龜藏

任東京美術學校教授（同日）

敍高等官七等

教授 古宇田 實

印度ヲ留學國ニ追加ス（十一月十二日）

同 津田 信夫

鑄造科主任ヲ命ス（十一月十四日）

梅本 馨

東京美術學校雇ヲ命ス（十一月十七日）

會計掛ヲ命ス

教授 島田 佳矣

學術研究ノタメ宮城縣へ出張ヲ命ス（十一月二十日）

●職員動靜

○矢代 幸雄氏 十一月一日兼官なる第一高等學校教授を免ぜられ本校教授專務となれり。

○畑 正 吉氏 十一月二十五日賞勳局事務を囑託せらる、賞牌製作に關してのことなりといふ。

○田 邊 孝 次氏 勤務演習の爲め入隊中の所十一月三十日除隊す。

●本年度文部省圖書講習會 十月二十七日より十一月八日迄本校大講堂に於て開催されたるが、本年度の講師と其講題、併に講習員氏名次の如し。

講師

- 一、考古雜説 教授 大村 西崖
- 一、圖書教授法 同 白濱 徵
- 一、寫眞及印刷 同 鎌田 彌壽治
- 一、美術の鑑賞 講師 菅原 教造
- 一、意匠及圖案 同 今 和次郎

●圖書講習員氏名

○印を附けたるは本校卒業生なり

- 北海道札幌師範 教諭 ○菅原次郎
- 小樽高女 教諭 笹原松代
- 東京府立第一高女 教諭 ○荻生守俊
- 同 第三高女 教諭 ○今井伴次郎
- 日本橋高等小學 訓導 狩野太郎
- 同 訓導 田島長齡
- 豊島師範 教諭 ○井上良慶
- 松葉小學 訓導 市村兼高
- 青山師範 教諭 赤津隆助

女子師範

- 佐久間尋常小學 訓導 高橋喜一郎
- 江戸川尋常小學 訓導 三森連象
- 京都府加佐郡立高女 囑託教員 菅治 易
- 大阪府立市岡高女 教諭 ○黑田純二
- 堺市立堺女子手藝 教諭 ○西岡純平
- 大阪市高津尋常小學 訓導 大熊進治郎
- 神奈川縣師範 教諭 ○西松團三
- 兵庫縣縣立姫路中學 教諭 ○飯田 勇
- 第一神戸中學 教諭 ○倉智亮三
- 縣立神戸高女 教諭 河合鹿次郎
- 神戸市菟田尋常小學 訓導 石井一二
- 多紀郡立高女 教諭 ○田中 寬
- 縣立姫路高女 教諭 ○湧口 滿
- 長野師範 教諭 ○小林長太
- 女子師範 教諭 ○岡登貞治
- 縣立佐世保高女 教諭 ○佐藤正巳
- 新潟縣長岡女子師範 教諭 ○藤卷宣治
- 卷中學 教諭 ○安岡信義
- 村松中學 教諭 ○松川第八郎
- 埼玉縣立師範 教諭 加藤邦造
- 大里郡熊谷男子尋常高等小學 訓導 栗卷直祐
- 縣立熊谷高女 教諭 田村龍吉
- 群馬縣相生高女 教諭 ○小林 寬
- 前橋市久留間尋常高等小學 訓導 早川眞清
- 佐波郡境町尋常高等小學 訓導 五代規信

千葉縣松戶實科高女	教諭兼校長	吉原喜一郎	石川縣立工業	教諭	澤村昌勝
野田尋常高等小學	訓導	香取任平	金澤市馬場尋常小學	訓導	不破貞二郎
茨城縣立水戸高女	教諭	飯田芳文	同市新堅町尋常小學	訓導	紺谷圓作
久慈郡太田尋常高等小學	訓導	江幡邦之助	鳥取縣立米子中學	教諭	門脇勲
栃木縣宇都宮尋常高等小學	訓導	神戶主馬太	島根縣女子師範	教諭	板垣繁樹
奈良縣立櫻井高女	教諭	○富田一昭	岡山縣倉敷町倉敷商業囑託	教師	藤田安二郎
三重縣立津中學	教諭	○我妻榮吉	勝山高女	教諭	脇山伊左衛門
師範	教諭	○山岸貞一	廣島縣立福山高女	教諭	長谷川德巖
愛知縣渥美郡田原町立中學校成章館	教諭	○太田留雄	德島縣師範	教諭	須木治郎吉
名古屋市立第二高女	教諭心得	尾關太郎吉	板野郡立實科高女	教諭	岡本安靜
名古屋市立主藏尋常小學	訓導	鈴木三和治	愛媛縣松山市立松山第三尋常小學	訓導	野本房吉
同市第二高等小學	訓導	中野廣	高知縣立第二中學	教諭	田內千秋
靜岡縣靜岡郡立濱松中學	教諭	栗野保次郎	福岡縣立柳河高女	教諭	○佃鶴雄
滋賀縣女子師範	教諭	北垣巳之助	縣立築上高女	教授囑託	長峰五月
師範	教諭	○今井重信	大分縣立中津高女	教諭	福田正次郎
長野縣松本女子師範	教諭	○藤岡龜三郎	佐賀縣立有田工業	教諭	福田正次郎
宮城縣女子師範	教諭	山形寬	宮崎縣師範	教諭	鳥飼清光
福島縣立相馬中學	教諭	齋藤久基	縣立宮崎高女	教諭	古加江宗二
同 會津高女	教諭	田中誠吾	都城女子尋常高等小學	准訓導	神田ふみ
青森縣立弘前高女	教諭	○相馬治四郎	鹿兒島縣女子師範	教諭	○宮崎秀勇
青森高女	教諭	○松田義之	鹿兒島市立女子職業學校	教諭	○前田正八郎
山形縣立酒田高女	教諭	工藤てふ	沖繩縣女子師範	教諭	○樋渡留太郎
鶴岡高女	教諭	○相馬正巳	臺灣臺中高等普通學校	教諭	○郷原藤一郎
秋田縣女子師範	教諭	○三澤佐助	宮崎縣都城高女	助教	富松柏
福井縣立武生中學	教諭	○森田靜也	東京美術學校	助教	○波根義三
			長崎縣長崎高女	教諭	○霜田利平

朝鮮大邱高等普通學校	教諭	○多木孝
長野縣立諏訪中學	教諭	○山崎秋成
栃木縣栃木高女	教諭	○有安助二
岡山縣私立與讓館中學	教師	○岡野賢三
		鳥山新四郎

関連事項

① 三浦光風辞任と牙彫部廃止

彫刻科は明治四十年六月以降塑造、木彫、牙彫の三部制をとり、牙彫部は教授石川光明と雇三浦光風（本名柳三郎）が指導にあたっていた。大正二年に光明が死去した後は光風が後任となり、同七年十一月に助教教授に任命されたが、翌八年一月には辞職（同年歿）し、後任の採用は無く、牙彫部は事実上廃止（制度上は同十二年）となった。その間、大正五年に卒業生一人、同七年に中退者三人、同八年に卒業生二人、中退者三名があったのみである。なお、牙彫部最後の卒業生であった故後藤藤清一氏（明治二十六年〜昭和五十九年）の談話によれば、氏は牙彫修業の後に大正四年に東京美術学校に入学したが、二年後には牙彫教育はとり止めとなり、木彫部に編入されて高村光雲の指導を受けたという。

② 日本創作版画協会

大正八年一月十五日から二十日まで三越呉服店で日本創作版画協会第一回展が開催された。同会は前年六月に山本鼎、寺崎武男、織田一磨、戸張孤雁、竹腰健造らが結成した団体で、その趣旨は、西

洋の美術展覧会には必ずエッチングや木版画の作品が出るのに対して日本では非常に優れた版画の伝統があるにも拘らず、文展は版画を排斥し、東京美術学校も製版科がありながら写真製版やコロタイプ等工業的製版を専らとしており、版画の奨励策は全く講じられていないので、自画、自刻、自摺の趣味ある創作版画を発表して世人の注意を喚起しようということにあった。第一回展の出品者は上記五人の外に石井鶴三、小泉癸巳男、萬鉄五郎、永瀬義郎、広島晃甫、逸見亨、前川千帆、喜多武四郎、バーナード・リーチ、M・マニング、恩地孝四郎、藤森静雄、故田中恭吉、故香山藤祿らで、木版画が過半数を占めた。展覧会が大きな反響を呼び、成功をおさめたため、同会は以後毎年展覧会を開くこととし、官設展に版画部門を設けること、東京美術学校に版画科を設置すること、創作版画の普及と版画家出現を促すこと、教習所を設立することなどを目標（『日本創作版画協会第七回展覧会目録』昭和二年）に活動を始めた。その結果、大正十五年には版画も帝展に出品できるようになった。同会は昭和六年に日本版画協会へと発展するが、その近代版画史上の功績は甚大であったと言える。

ところで、創作版画運動と東京美術学校の関係を考えてみると、上記の第一回展では卒業生の山本鼎（三十九年）、寺崎武男（四十年）、石井鶴三（四十三年）、萬鉄五郎（四十五年）、広島晃甫（同）、藤森静雄（大正五年）や中退生の恩地孝四郎、田中恭吉（大正四年歿）らが活躍しているが、そのうちの最も先輩の山本鼎は、そもそも創作版画運動の発端を作った一人である。彼はすでに卒業の翌年五月には同期の森田恒友および眼病で中退した石井柏亭らと『方寸』を発行し、これ